

# 漢方トゥデイ



2023年8月3日放送

ストレスと漢方⑫

シリーズまとめ 四逆散を中心に

三重大学医学部附属病院 漢方医学センター 高村 光幸

みなさんこんばんは。今回は四逆散を中心に、これまで1年間続けてきましたストレスと漢方治療のまとめとさせていただきます。

まずは自験例からお示しします。

20代女性。高校生のころからのひどい肩こりと後頸部痛を主訴に受診されました。親族にくも膜下出血の方がいたため精査しましたが、緊張型頭痛と診断されたようです。2年前に就職してから、ストレスで頭痛がさらに悪化したとのことでした。本人いわく情緒不安定のぎみで、耳鳴りやめまいをときに感じるようです。月経の際は腹痛もあり、一段と頭痛がひどくなります。手足に冷えがあります。脈は滑脈、舌は淡紅色で舌先に点刺を少し伴います。腹部は緊張が強く、胸脇苦満と腹直筋の緊張を認めました。

心理的背景を考慮し四逆散としたところ、飲みやすく、頭痛が以前ほど出なくなったといえます。その後継続服用で効果を感じるとして、症状が出なくなりました。

20代男性。中学生の頃から側頭部の締め付け感、拍動感を伴う痛みがみられ、緊張やストレスを感じるとその後症状が出やすくなるといいます。鬱病としての精神科加療も2年前から受けていました。頭痛は片頭痛を主にした複合型とみられ、トリプタン製剤なども処方されていましたが、十分な効果がないということでした。腹痛もよく起こるといいます。腹直筋が全体に浮き出て見える緊張した腹部を呈し、胸脇苦満も伴いました。脈はやや弦、舌は淡紅色で薄白苔でした。不眠、倦怠感、咽の痞え感、おなかの張りがあり、動悸、憂鬱

感、イライラもあります。不安感が症状を悪化させると話されていました。

四逆散を処方したところ、頭痛や腹痛の訴えは軽減し、2年間の服用を続けた後も、少量で継続していただいで安定しました。

20代女性。5年ほど前から便秘や下痢を繰り返し、過敏性腸症候群と診断されています。難聴があり、強迫神経症状の既往がある方でした。不眠、排尿困難、頭痛、めまい、生理痛、内痔核の訴えもあります。問診や経過からは、ストレス脆弱性が考えられました。脈は細く弱く、舌は淡紅色で薄白苔、腹部は中等度で臍上悸を認めました。

四逆散に乙字湯を併用して処方したところ、便性や腹痛が改善しました。そのうちに、逆流性食道炎を疑うような嘔気やむかつきの症状が出だしたために、四逆散はそのまま、乙字湯を茯苓飲に変更したところ、症状は改善し、生理痛もよくなりました。

これらの症例は、いずれも精神的な背景が強く影響して増悪する身体症状、心身症だといえるでしょう。メーカーごとに異なりますが、たとえばツムラの四逆散エキスの保険適用病名には、胆嚢炎や胆石症、胃炎などの消化器疾患、気管支炎などの呼吸器疾患のほか、神経質、ヒステリーというものがあります。これらの病名だけでは、少し使いにくい印象もあるかも知れませんが、神経質、ヒステリーという言葉に表されるように、実は心身症にとっても有効な処方なのです。

この四逆散を治療に多用した有名人に、和田東郭という人がいます。彼は、江戸時代後期の名医で、「人の病はとかく肝よりおこる」とし、その治療によく四逆散を用いたようです。

和田東郭は五臓の肝を重視し、「肝気を妄動させないように」と繰り返し弟子に伝えていたことが、『蕉窓雑話』などから伺えます。他人に勝ろうとして及ばない願望を起し、際限なく考え続けるようなことをすれば、肝気が妄動して病になるのだと述べています。そして、現代医学でも心身症としか呼べないような難治な病態について、四逆散などを用いてすぐれた治療を残しているのです。多くの難病に有効なため、四逆散は希代の靈方であるとまで彼は述べているのですから、四逆散の応用範囲は、とても広いものだと考えられます。

さて、和田東郭は薬物療法のみならず、説諭といった一種の精神療法が得意な医師でした。漢方医学の伝統的な精神療法に、移精変気の法と呼ばれるものがありますが、病気の元凶となっている執着心、意識や認識などを、様々な方法によって転じて治す方法のことです。言語でもって説諭するのは、その移精変気の法のひとつとなりますが、和田東郭はそれに秀でていたということなのです。

そこで私なりの説諭、移精変気の法とも考えられる興味深い経験を最後にお話ししましょう。

20代男性。半年前、突然起床時に右脚に力が入りにくくなって以来、うまく歩けなくなってしまうといいます。複数の科で詳しく精査を受けましたが原因は不明、結果的に精神科へ紹介となり、心因性の疑いとされました。しかし一向に改善がなく、漢方外来へと紹介されてきたのです。彼はすでに発達障害の診断を受けていました。初診時、杖をつけて入室され、座位をとって右脚膝関節を伸展させるようにすると、著しく震えが出ます。じっとそこへ目をやると、余計に震える感じがあります。さて脈は滑、舌は淡紅色薄白苔で、歯痕が著明です。腹部は、腹力が非常に強く、過緊張の状態です。こそばゆいとして、うまく触診できないほどです。

甘麦大棗湯、抑肝散を処方しましたが、改善ありませんでした。初診から9ヶ月が経過したある日、十分に信頼関係ができたと考えた私は、毎回母親同伴で受診している彼の今後の目標や、人生設計について話をじっくり聞いてみました。発達障害の背景からか、将来への不安があり、それに伴う現実逃避的な心理状況が明らかに見て取れました。症状出現の1年ほど前、彼は父親を亡くしていたことを知っていた私は、父親の代わりになったつもりで、少し厳しい話をしました。詳細は伏せますが、あくまで治すのは自分であって、我々はそのサポートをするのみである。今後の長い社会生活にも、前向きな努力をしていく強い心構えが必要だ、という内容のものでした。果たして、1か月後に再診した彼は、杖を使わず、普通に歩いて入室してきました。昔を思い出して自然に歩くことができました、というのです。付き添いの母も、前回のお話のあと、すぐに歩けるようになりました、奇跡ですと驚き喜んでいました。正直、私も驚きましたが、その後2ヶ月かけて漢方を漸減しても、再燃なく過ごせていましたので、終診としました。その後、無事彼は就職し、歩けなくなることは二度となかったようです。

いかがでしょうか。『蕉窓雑話』をよく読むと、実は似た症例があることに気がつきました。とある神社の老夫婦の養子で、30歳ほどになるが立って歩くことができずに1年半困っているという症例です。これに対して和田東郭は、脚にはなにも病気がないとして、無理矢理立たせてみたら実は立つことができ、肝気の変動にてこんな症状が出たのであるから、これから先は私のいう養生を背くことなく謹んで実行しなさいと説得する様子が出てくるのでした。

私が和田東郭ほどの名医に近づいたなどと、驕って自慢するわけでは決してありませんが、漢方薬を使わずとも治療する漢方医学の真髄を垣間見た気がして、印象に残る経験でした。